

2011年3月11日14時46分牡鹿半島の沖合を震源とする東北地方太平洋沖地震(マグニチュード9)が発生し、東日本の太平洋沿岸を大津波が襲いました。大津波は沿岸の集落をことごとくなぎ倒し、多く人の命を奪い、人家や工場などの建物、道路や港、多くの防潮堤までをも破壊し尽くしました。この大津波は、明治29年6月15日、昭和8年3月3日の「三陸大津浪」をはるかに上回る大規模なものでした。

東日本大震災津波による浸水範囲を詳細かつ正確に記録することを目的として、青森県下北半島尻屋崎から千葉県房総半島館山市希良漁港までの海岸線沿いを、震災から1月後の2011年4月から6月にかけて現地調査しました。その結果を『東日本大震災津波詳細地図』(原口強・岩松暉著:古今書院、2011年10月)として出版しました。

地図の内容は、津波の浸水域を容易に理解できるように、等高線が読みとれ、個々の建物まで識別可能な国土地理院発行の2万5千分の1地形図を背景図とし、この上に津波の浸水範囲を色で表現しました。その上に津波の高さ(標高)を、「東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループ」が公表した津高の一部を抜き出して地図上に表示させました。現地踏査に基づくデータを基本とし、立ち入りが出来なかった部分は、日本地理学会の判読図を参照し、被災直後の空中写真等(国土地理院が撮影した空中写真、Google社のgoogle earthの画像)から浸水範囲を推定しました。

この地図は、短期・中期的には復興計画の基本資料となり、さらに今後数年以内に発生が危惧される最大余震に伴う津波に対するハザードマップとなります。長期的には、大津波の事実を正確に後世に伝える貴重な資料の一つです。

津波は巨大災害をもたらす一方で、その発生頻度は低く、10年、20年と時が立ち、まして津波を経験していない世代となると人々の中で、その記憶が薄らいでいきます。しかし自然は規則正しく、次の大津波へのカウントダウンをもうすでに始めています。津波はその発生を止めることはできません。しかし、津波から命を守ることはできます。既に寺田寅彦が指摘していたように、記念碑の類はいずれ忘れ去られてしまい、あまり役立ちません。正確な科学的事実を残すことこそ、後世の減災につながるものと考え、この詳細地図を作成しました。津波を生き抜いた人々は、世代を超えて東日本大津波の事実を受け継いでいく必要があります。この『東日本大震災津波詳細地図』は、その資料の一つです。その他、広島原爆ドームのように、被災遺構の実物を残すことも後世の減災に役立つものと思います。

『気仙沼市東北地方太平洋沖地震津波浸水図』は、『東日本大震災津波詳細地図』から、気仙沼市に関わる部分を抜き出して作成されました。大津波の現実を正確に受け止め、地域の50年先、100年先を見据える上での地図として、世代を越えて伝えていっていただきたいと考えます。

地図作成には、特定非営利法人ワールド・ビジョン・ジャパンに支援を頂きました。ここに謝意を表します。

(大阪市立大学准教授 原口 強・鹿児島大学名誉教授 岩松 暉)